

「信じることが求められている」

創世記 15:1-21

鄭 ヒムチアン

創世記 15:1-21

- 1 これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。
「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」
- 2 アブラムは言った。「神、主よ、あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないままで死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。」
- 3 さらに、アブラムは言った。「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらなかったで、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょう。」
- 4 すると見よ、主のことばが彼に臨んだ。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」
- 5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」
- 6 アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。
- 7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」
- 8 アブラムは言った。「神、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」
- 9 すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」
- 10 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。
- 11 猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。
- 12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。
- 13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。
- 14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。
- 15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。
- 16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである。」
- 17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

- 18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで。
- 19 ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、
- 20 ヒッタイト人、ペリジ人、レファイム人、
- 21 アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の地を。」

創世記 15 章の冒頭にある「これらの出来事の後」という言葉は、14 章で起こった出来事を指しています。14 章において記されていることを簡単に振り返りますと、アブラムが住んでいたカナンの地にあったソドムとゴモラを代表する 5 人の王たちは東方にあるエラムという国に従っていました。しかし、ある時を機にエラムに対して反旗を翻します。するとエラムの王であるケオドラオメルは東方の周辺諸国を率いて非常に強力な軍隊を作り、カナン一体に次々に攻め入ってはあらゆる国々を制圧し、ソドムとゴモラも敗北させすべての財産と食料を奪い取っていきました。このソドムにはアブラムの甥であるロトが住んでおりましたが、このロトの一家も皆捕虜にされました。ロトが捕虜になったと知ったアブラムは、戦士を率いて東方の王たちを打ち破り、勝利を収めました。このような出来事の後、アブラムに幻として神のことばが臨みました。

15:1 これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。
「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

この言葉は、アブラムにとって大きな意味を持つものでした。神がここで語った「盾」という言葉は、14:20 で神の祭司メルキゼデクが「(敵をあなたの)手に渡された」と祝福した言葉と、同じ原語が用いられています。メルキゼデクの祝福のことばを神様が同様にお語りになり、これが確かであると約束してくださっているのです。ここで神様がアブラムに私はあなたの盾だとおっしゃる意味は、神ご自身がアブラムを敵から守られ、アブラムを脅かすあらゆる脅威からすべてを跳ね返す盾のように彼を守られるという約束です。さらに神様は続けて「あなたへの報いは非常に大きい。」とおっしゃいました。この報いとは何らかの取り組みに対する「報酬」をさしている言葉です。神様がアブラムに与えようとされている報酬が非常に大きいのだということです。

神様がこの時アブラムに告げられたこのことばの意義をもう少し考えてみたいと思いますが、このことは先ほど述べたようにこれらの出来事の後という言葉にある通り、14 章の内容と照らし合わせながら考えるべきであろうと思います。14 章において、東方諸国の王を打ち破り勝利をあげたアブラムはカナン一体を制圧した偉大な勝利者、カナンの王ともよべるような地位になっています。人の欲というのは逆境の日にはその人の心に秘められていて、成功した時に表出して人々を驚かせるものですが、アブラムはカナン一体を制圧した勝利者、覇者となった際、彼がどんなことをしたかを見ると彼がどんな人間で、どんなことを願っていたのかが見えてきます。

アブラムは勝利後、神の祭司であるメルキゼデクにすべてのものの十分の一をささげ、この勝利が神によるもの、さらには勝利の栄光を神に帰しました。同時にその勝利者となったアブラムにソドムの王はやってきて

報酬を取らせようとするわけですが、アブラムはそれをきっぱり拒否し、ソドムの王によって自分が富むことを拒みました。ここから、アブラムは人によって富むのではなく神によって富むことを願っていたということが見えてきます。

またアブラムは当時アモリ人マムレのところに住んでおり、14 章 13 節に記されていますがアモリ人と盟約を結んでいます。そして 14 章 24 節において分かるように、ロトを救出しに行く際に盟約関係にあった彼らとともに出陣しており、アブラムがアモリ人らとは貸し借りをせず、きっちり精算している姿が見られます。アブラムはこの盟約の下に庇護を求めているようには見えず、この盟約に自分の安全をかけているような姿もみられません。ここから言えることは、アブラムは寄留の地においてよそ者として生きていかななくてはならない中で、知恵をもって生きることにはしていたものの、周辺の諸民族に自分を従わせ、それが自分を守る要であるかのような生き方はしなかったということです。

この 14 章の最後の箇所はおいて表れるアブラムの選択と決定、そしてそれに基づく行動がアブラムのうちにある一つの明確ではっきりとした軸を物語っています。それは「根本的なところで私を守るものは人の力ではなく、神が私を守られるという確信」であり、「私は人によって富むのではなく神によって富むことを求める」という生き方です。

これらの出来事の後に、主は「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」と仰せられたのです。アブラムの神様に向かう忠実な姿と神様へのぶれない求めに、神様が「あなたが求めているように私はまさにあなたにとってそうである」と明確に答えてくださっている出来事であるでしょう。

するとアブラムは神様に申し上げました。2,3 節

15:2 アブラムは言った。「神、主よ、あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないままで死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。」

15:3 さらに、アブラムは言った。「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらなかったで、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょう。」

この箇所を読むとアブラムが神様に対して不平を言っているように思われるかもしれませんが。確かにこの 2,3 節において「神様これはいったいどういうことなのですか」といったようなアブラムの感情が吐き出されている様子は垣間見えるのですが、これは不平というよりも、アブラムが神様の約束に対して真剣であったということではないかと思います。アブラムが神様に申し上げているのは、彼の子孫のことです。神様は創 13 章においてこのカナンをアブラムとその子孫に与えられると約束されました。しかし、またその約束は実現しておらず、その兆しも見えませんでした。故に約束にしがみつこうようにアブラムが求めるのです。それは 3 節にある「あなたが子孫を私に下さらなかったで」という言葉にもあるように、アブラムは神様こそ自分に子孫をお与えくださる方であるというところに立っています。

さらにこの 2,3 節のアブラムの言葉を見ていく時において、この背景にアブラム自身が自分の体の死を自覚していたということを考える必要があると思います。それは 2 節にある「私は子がないままで死のうとしてい

ます。」というアブラムの言葉から読み取れます。つまり、アブラムは自分が子を宿すにはもう無理な体であることを念頭に神様にこのことを申し上げているということです。ですから彼のしもべであるエリエゼルの名を相続者として出して、神様こういう方法で神様の約束が実現されるのでしょうかと問いかけているのです。

15:4 すると見よ、主のことばが彼に臨んだ。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」

神様はアブラムが語った方法ではないとはっきり、きっぱり語られます。アブラム自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならないと言われました。ここで「あなた自身」と訳されている言葉は直訳すると「あなたの腰から出てくる者」です。つまり、これは誰かを迎えて養子にすることなどではなく、アブラムを通して生まれた者が後を継ぐ者であることを神様は命じられたのです。

そして5節にあるとおり、神様はアブラムを外に連れ出して、空の星をお見せになりました。神様は実際にアブラムの目に見えるものをお示しになり、約束を確かなものとしてお与えになろうとされました。アブラムが見上げた空、それは今私たちが住んでいる環境とは違い、夜は電気の光もなく、さらには空気は極めて澄んでおり、こぼれ落ちそうなほどの多くの星が広がるまさに満天の星空であったと思います。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」と言われたアブラムは数えることのできない、数え切れない星を見ていたことでしょう。その無数の星を見ているアブラムに神は言われます。「あなたの子孫は、このようになる」と

15:6 「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」

この約束された神様、主をアブラムは信じたと聖書は語っています。聖書において信じるということが初めて記された箇所です。ここで信じると書かれている言語は「ヘーミン」という言葉で、その派生となる言葉には私たちがよく知っている「アーメン」があります。「その通りである、信じる」という意味です。さらに6節ではつづけて、「それで、それが彼の義と認められた。」と記されています。アブラムが約束された神様を信じた時、それが義と認められたのです。誰が認めるのかというと、もちろん神様が認めたのです。神が人を義と認められるということは、神様とのただしい関係の状態にあるということです。神様との関係において神様があなたはそれで良い、OKと言ってくれることです。

これは人の救いに関わる極めて大切なことであります。エデンの園においてアダムとエバが神様を退けて以降、人類は墮落の中に生きており、神と人の関係は破綻していました。しかし、この創世記15章6節においてはじめて神が人を義と認められたということが記されており、驚くべきことはそれが信仰によるのだということです。故にこの15章6節は聖書においての非常に大事とされる聖句であり、新約聖書において何度も繰り返し引用されています。私たちがよく耳にし、そして教会がずっと大切に立ち続けている「信仰義認」(信仰によって義と認められる)のはじまりはここです。ですから私たちはこのみことばが語ろうとしているよく考え、私たちの血肉にする必要があります。

私たちは聖書から、または教会において信仰の話を聞く時、今もそうかもしれませんが、「信じよう、信じよう」と自分を奮い立たせて、意識的に自分をその状態に持っていこうと頑張ることがあるかもしれません。ですが、今日の創世記のみことばをみると、アブラムは自分が信じたということをまったく意識していないように見えます。6 節をもう一度よくご覧いただくと分かると思いますが、この 6 節は誰かが口にしたことばではなく、第三者的な視点から語られていることばです。天を見上げ、神様の約束を聞いているアブラムを傍らに、アブラムは主を信じた、そしてそれが彼の義と認められたということが説明されている書き方で記されています。

つまり、アブラムはこの時自分は信じたとか、そしてそれが神様から義と認められたということは知らないわけです。これは神様だけがご存知であったわけです。神様がアブラムを見て、アブラムの心をご覧になられてそこに信仰を見出され、それを良しと認められたということです。つまり、信仰とは私たちが意識したり、今信じましたと言えるものではなく、神様に対して、神様のことばに対しての私たちの心のなかにあらわれる応答であり、これを信仰として見出されるは神なのです。神様は人にことばを語られ、そしてご自分の言葉に対して、人がどのように反応するか、人の心を見ておられるのです。

この 6 節におけるアブラムの信仰の内実、その中身についてもう少し考えてみたいと思います。もちろんアブラムが信じていたのは神様の約束であったのですが、アブラムが具体的にどんなことを信じていたのかということです。先程 2 節を見た際、アブラムは自分の体の死を自覚していたと言いましたが、アブラムはもはや自分から生まれてくる子どもは肉体的に不可能であると悟ったのです。故にエリエゼルを相続者とすることを神様に話しました。しかし、神様はそのアブラムに対して、あなたの腰から出てくる者があなたの跡を継がなければならないと命じられました。そして神様のことばをアブラムは信じたのです。ここにおいてアブラムは何を具体的に信じたのかが見えてきます。それは「神は死からいのちを生み出すことのできる方」であるということです。このことはローマ書 4:17-22 のパウロの言葉を通して明らかにされています。

ローマ 4:17-22

17 「わたしはあなたを多くの国民の父とした」と書いてあるとおりです。彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。

18 彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。

19 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。

20 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、

21 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。

22 だからこそ、「彼には、それが義と認められた」のです。

17 節において、アブラムが死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じたと書いてある通りです。そしてこの信仰は 18 節にある通り、望み得ない時に望みを抱いて信じた信仰です。つまり不可能な状

況において、そのことが到底実現するとは思えない状況においてアブラムは神の約束がそのとおりにになると確信したのです。これがアブラムの信仰でありました。

神は死からいのちを生み出すことのできる方、つまりアブラムには復活信仰があったのです。そしてこの復活信仰はやがてモリヤの山でひとり子イサクを献げたときに行いとなってあらわれ、完成したことも忘れないでおきたいことです。

このアブラムの信仰をご覧になられた神様は、この後アブラムと契約を結ばれます。7 節から 21 節にこの契約の一部始終が記されています。この契約の内容を全体的に見ながら考えたいと思いますが、まず確認しておきたいことはこの契約の内容です。7 節に「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」、そして 18 節で「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」と明らかにされているように、神様はこのカナンの地をアブラムとその子孫をお与えになるということ約束しておられます。

8 節においてアブラムがそのしるしを神様に求めます。すると神様は 9 節において「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」と言われます。アブラムはそれらすべてを持って来て、鳥以外の動物は真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにしました。

神様がアブラムに命じられた、この不思議な契約の儀式には、古代中近東の契約慣習と共通する点があります。ヘブル語で「契約」という言葉には「切る」という意味があり、当時は動物を真っ二つに切り裂き、その間を通ることで契約を結びました。これは、もし契約を破れば、自分もこの切り裂かれた動物のようになるという、いわば誓いの儀式でした。エレミヤ書 34 章 18 節にも、このことが記されています。

ただこの理解が間違っているとまでは言えないものの、それだけでは神様がここで命じられた儀式のすべての特徴を説明しきれないところがあります。特に 9 節において、神様がアブラムに用意するよう命じられた動物は 5 種類ありますが、なぜこの動物なのか、その理由を説明することができません。実は、この動物の種類は、イスラエルの民が出エジプト後に荒野で神様に献げたいけにえと同じ動物であります。詳しくは述べませんが、レビ記においてこのいけにえの動物は献げる人そのものを表しています。つまり、裂かれた動物はイスラエルの民そのものを表していると考えられます。実際この後の 15 章の続きを読んでいますと、神様はアブラムから出る子孫の出エジプトについての預言をお与えなっていますが、この預言との深い関連を見いだせることからそうと言えるでしょう。

11 節にはその裂かれた動物たちの上に猛禽が降りてきて、アブラムはそれらを追い払っていますが、これは後の日にアブラムの子孫を苦しめる脅威があるものの、守られることを指していると考えられます。契約締結のための儀式の準備がなされると 12 節にあるように深い眠りがアブラムを襲い、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲いました。アブラムを襲った深い眠りは彼の死を、そして大いなる暗闇の恐怖は、そのアブラムの死後に彼の子孫に押し寄せるエジプトでの苦しい奴隷生活を指しているでしょう。アブラム自身の死は 15 節におい

て「あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。」と語られています。

そして 13-16 節において神様はアブラムに将来アブラムの子孫たちがエジプトにおいて 400 年間、奴隷となって苦しめられること、しかし、その後神様はエジプトをさばき、イスラエルの民たちは多くの財産とともにそこから出てくる、つまり出エジプトの出来事が明らかにされています。ここにおいて神様の壮大なご計画が示されるのです。それは今ではないはるか先のアブラムから 4 代目の者たちのことです。それはアモリ人の咎が満ち、神様がカナンを裁かれイスラエルに渡される始まりのときであり、同時にそれまでの 400 年神様はエジプトにおいて、アブラムの子孫をおおきに増やされる備えの時でありました。

17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」

「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」は神様の臨在を象徴しています。出エジプトの時、十戒をお与えになるとき、シナイ山において火の中あって降りてこられ、山全体がかまどの煙のようであったことが書かれています。先ほど確認したように裂かれた動物がイスラエルを表すなら、この動物の間を通られた神様がお示しになられたことはどういうことでしょうか。それは神ご自身がイスラエルの民とともに歩まれるという宣言、神がこれをなさるといふ約束ではないでしょうか。実際のところ、この契約においても一つ注目すべき点があるのです。それは契約の儀式的場面で動物を裂いて並べた後、その間を通ったのは神だけであったということです。本来は契約を交わす二人がその間を通るはずですが、神様お一人が通られた。これは、「この契約は神が責任をもって実行する」というしるしです。神が約束を守るためのすべての責任を、自分一人で負われたのです。さらに、この契約は「もしあなたがこうすれば、私はこうする」という条件はありません。十戒に見られるような契約には、人々が神の律法を守ることが前提でしたが、アブラハムとの契約はそうではなく、神が一方的に「必ずこうする」と約束されたものでした。アブラハムの行動や出来不出来に関係なく、神の恵みだけによって与えられた約束です。

ここまで、創世記 15 章のみことばを考えましたが、最後にこのみことばから現代の私たちが学ぶべきことを確認したいと思います。

この 15 章は、私たちが御言葉を通して確認したように、約束してくださる神、そして神の言葉を信じることの重要性を特に強く語りかけています。それは 6 節に記されている通りアブラムの信仰が義と認めたということにありますが、私たちここにおいて注目して考えてみたい点がもう一つあります。それはなぜアブラムの信仰がここではじめて、ひいては聖書においてはじめて信じることが記されているかということです。

アブラムが主を信じたのはこの 15 章の時が初めてであったでしょうか。そうではないでしょう。アブラムはハランから出てきた 12 章のときにも、アブラムは神様のみことばを信じて出てきました。それだけではなく 15 章に至るまでアブラムの歩みは神を信じる歩みでありました。実際に 15 章 6 節の「信じた」と訳されているヘーミンは継続的で繰り返される語形で記されています。それでだけではありません。聖書は最初から最後まで、人は神を信じなければならないという事実を前提としています。であるならば、何故この 15 章において、はじめて信じたということが記されているのでしょうか。それはこれを読む後代の者たちにアブラムの信仰を模範として示すためではないかと思います。つまり、アブラムの信仰はすべての彼の子孫たちが従うべき手本として記されており、それはこの信仰によって、神様より義とされるためであります。つまり、今日このみことばを読む私たちは、今、信じることが求められているのです。

アブラムの信仰は「神は死からいのちを生み出すことのできる方」であり、それは望み得ない時に望みを抱いて信じた信仰です。つまり、人間的には決して不可能な状況において、そのことが到底実現されるとは思えない状況においてアブラムは神の約束がそのとおりになると確信したのです。私たちを見るとどうでしょうか。望み得るときには信じ、望み得ないときには信じられないということはないでしょうか。しかし、それでは私たちの信仰とはこの世を生きていくための信仰になってしまうのではないのでしょうか。そうではありません。今日私たちに求められている信仰はそのようなものではありません。信仰によって生きていくのです。そして死んでも生きるのです。神様は今日のみことばを通して、あなたもこのアブラムの信仰をもちなさいと求められているのです。最終的には神についていけば死んでも生きるという確信があるかということが問われているのだと思います。

パウロも＜ローマ 4:23-25＞においてこのように述べています。

23 しかし、「彼には、それが義と認められた」と書かれたのは、ただ彼のためだけでなく、

24 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。

25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。

創世記 15:6 が記されたのはアブラムのためだけではなく、私たちのためでもある、それは私たちも義とされるためであるのだとパウロが語っているとおりです。これは私たちに向けられた救いのメッセージです。新

約の時代に生きている私たちにはキリストの十字架と復活による一方的なめぐみの契約が与えられており、これを信じる私たちも義と認められるのだと約束しています。

教育主事として子どもたちと過ごしていると気付かされることが多くあります。幼い子どもたちと接していると聖書に記された神様のみことばを素直に受け取っている姿に出会うことがあり、非常に学ばされるところがあります。しかし、このような心の状態は私たちが大人になっていくほどに消えて、変わっていきます。神様のことばと自分の考えがぶつかり、神様のことが信じられなくなっていくます。世間一般ではこれを成長と呼びます。しかし、私たちが身につけてきたあらゆる成長は本当に正しいことなのかもう一度問い直さなければなりません。

私は、現代人がアブラムの信仰を見た時、その論理の幼稚さに笑ってしまうということが起きるのではないかと思います。実際聖書のみことばを真剣に信じている人たちというのは世間では笑われるのです。昔からずっとそうでした。しかし、信仰とはそのようなものなのではないかと思います。この世においては愚か者、ばか者と呼ばれる者たちの中に信仰者がいるのです。

皆さんはこのばか者たちを見たことがあるでしょうか。友達に神様のことを言っては馬鹿にされている子ども、部活の試合よりも礼拝をささげることを第一としたら、チームメイトから罵られ、部活のレギュラーから外された少年少女、主への感謝のあまり勘定もせず献金をする人、家族を後回しにして主のために労した者、自分の時間、健康、利益は後回しにして文字通り献身した人、教会の純潔のために命を賭した殉教者たち。世はこういう人たちをバカ者だと言います。しかし、人に認められなくても、偉大な神がその人一人ひとりの心を見ておられ、義と認めてくださることを忘れてはなりません。ひいては、教会に集う私たちにおいては、その人たちうちにあった動機、神への信仰と愛を見出しているのでしょうか。私という人間をこの世界に形作ってくださった偉大な創造主への恐れ、こんなに罪深い者なのに、その罪の罰を下されないどころかなんと神の子が私のすべての罰を背負って死なれ、赦しを与えてくださったことへの尽きない感謝、復活によって確かにされた永遠のいのちへのぶれない確信。御霊が臨んでくださっていることから湧き上がる大きな喜び。状況がどうであれ、彼らは神を信じたのです。そして私たちも、今、その信仰が求められています。これは私たちの人生において最もすばらしい、これ以上ない光栄な招きです。

お祈りいたします。